

目的：ファッション行動は、何らかのパーソナリティの枠組みによって規定されて、行動していると言われている。この関係が明らかになれば、今後の被服行動の理論化には役立つものと考えられる。そこで、この関係を明らかにすることを本稿の目的とする。

方法：昭和62年7月・9月に女子大生120名を対象に質問紙調査法による集合調査を実施した。主たる調査項目は、被服行動・生活意識・アクセサリなどに対する傾向、および嗜好度、評価、態度である。調査に前後して、被験者にはYG性格検査を集団で実施してある。項目の尺度は、主に5段階尺度を、一部4～5選択肢を用いた。分析には、クラスター分析、クロス分析、分散分析、T検定、因子分析、数量化Ⅱ類の各手法を用いた。

結果：被服行動に関する105項目を4クラスターに分類された。①「ファッションに自信を持つ集団」(25.8%)「ファッションの購入に関心がある集団」(22.5%)「容姿に関心がある集団」(26.7%)「ファッションの関心が薄い集団」(25.0%)であった。②YGとの関係は、第2集団ほど「活動的」性格であり、第4集団ほど「非活動的」である($P < 0.01$) ③また第2、第3集団ほど「衝動的」性格であり、第1、第4集団ほど「非衝動的」であった($P < 0.01$)。第3集団ほど「社会的外向」性格であり、第4集団ほど「社会的内向」の性格が認められた($P < 0.10$)。④第2集団は、スカート丈が「短い目」であり、第4集団は「長い目」である($P < 0.05, CV = 0.266$) ⑤スカート丈の「短い目」を好む人は、「活動的」性格を示しており、クラスターの結果と整合性がある。以上のように、女子大生の被服行動を類型化でき、それぞれの集団には、性格や生活意識に特徴が有ることが認められる。